

茅葺き屋根と結の精神

合掌造りの家の茅葺き屋根は天候の影響によってすり減るため、通常は 20～30 年に 1 回、定期的に交換する必要があります。白川郷ではこの茅葺き屋根の交換は伝統的に、一度に最大 200 人の村人が参加する共同作業だったのです。厳格な互惠関係を前提とする、この白川郷の助け合いの精神を「結（ゆい）」と言います。家の所有者は、まずは同じ「組」の隣人に声をかけます。家が小さい場合は、茅葺き屋根の交換は 1 つの組で行うことができますが、家が大きな場合は、村の他の組からの支援が必要になります。

まだビニールシートが無かった時代は、茅葺き屋根の交換は 1 日で行う必要があります。現在でもほとんどの茅葺き屋根の交換は、このスケジュールに従っています。家主の家族は夜明け前に集まって屋根の古い茅葺きを取り除き、スキルと経験に応じて様々な役割を与えられた、「結」の参加者の到着のために準備を行います。通常は最年長の人が作業を監督し、若い人は屋根で作業をする人に草の束を渡したり、作業の後での片付けを担当します。家主の家族は日中は他の村人に軽食を出し、茅葺き屋根の交換が完了したら、参加者全員が参加できる「直会（なおらい）」と呼ばれる食事会を行います。

「結帳」と呼ばれる冊子には、行われた作業や茅葺きの材料、そして食事会の時の酒瓶の数まで、参加者の貢献が記録されています。このような記録の管理は、結の伝統において重要な 2 つの価値である、公平性と互惠性を確保するのに役立つのです。現存する最古の結帳は 1792 年からのもので、この結帳は、白川郷で 2 世紀以上にわたって屋根の茅葺きが共同で行われてきたことの証明になっています。現在は茅葺き屋根の交換はプロによって行われていますが、村人たちは今でも年に 1 回、通常は春か秋に集まり、結の精神で茅葺き屋根の交換を行っています。これは、茅葺き屋根の交換の技術が次の世代に確実に受け継がれるようにするために行われているのです。